

日本語スピーチ大会のための原稿作成 サポート・システムの必要性と課題

鹿 嶋 恵

Necessity of and Problems with a Support System to Help with Rough Drafts for Japanese Speech Contests

KASHIMA Megumi

〈Abstract〉

When foreign exchange students who are non-native speakers of Japanese participate in Japanese speech contests, they must prepare a rough draft of their speech and have the speech checked by native speakers of Japanese. This paper first points out the necessity of a support system in which Japanese student volunteers and Japanese language instructors assist with the drafting of a speech. Then, this paper discusses the problems encountered in implementing this system at the 12th Annual Japanese Speech Contest held at Mie University. In conclusion, the reexamination of role-sharing for Japanese student volunteers and Japanese language instructors in particular and the necessity of enhancing the liaison with coordinators are mentioned.

キーワード：留学生日本語スピーチ大会、原稿の作成、日本人のボランティア学生、日本語教育担当教官、役割分担

1. はじめに

スピーチを行う時は、いきなり話を始める場合もちろんあるが、多くの場合、事前に構成のメモを作ったり、原稿などを作るであろう。特にスピーチ大会のように、改まりの度合いが高く、スピーチの善し悪しそのものが評価の対象となるような場合には、前もって内容を文字にして推敲を重ねることは欠かせない。まして、それが外国語によるスピーチ大会となれば、スピーカーに余程の自信がない限り、あらかじめ原稿を作成し、母語話者によるネイティブ・チェックを受けるのが普通であろう。すなわち、「話す」という行為のために「書く」行為が必然的に要求されてくる。しかしながら、従来ほとんどの場合、それはスピーカー自身が自分で果たすべき準備作業として見過ごされてきた。

他方、近年、スピーチ教育の重要性が目され、スピーチそのものや教育方法に関する科学的な研究の必要性が提唱されてきた。しかし、これらの研究はまだ緒についたばかり

で、今後に期待するところが大きい (cf. 土岐 2001, 宇佐美 2001, 前川 2001)。

以下本稿では、まず、出場者である留学生がスピーチ原稿を作成する際、その作成を日本人のボランティア学生と日本語担当教官の両者が協力して支援するシステム (以下「原稿作成サポート・システム」) の必要性を指摘する。そして、三重大学における 2001 年度の留学生日本語スピーチ大会において実施した同システムの問題点を整理することで、今後の課題を探りたい。

2. これまでの経緯と問題点

2.1. スピーチ大会開催の経緯と状況

当三重大学における留学生日本語スピーチ大会には歴史があり、1990年に始まって以来すでに今年度で第12回を数える。当初は、日本語・日本事情担当教官を中心に、本学共通教育機構主催の行事として行われていた。1997年にその主催が留学生センターに移り、以来、当センターの基幹行事として継続されている。この間、より良いスピーチ大会の開催を目指し、日本語教育担当教官 (以下「日本語教官」) ならびに関係者の間で工夫と改善の試みが重ねられてきた。筆者の参与経験の理由から、ここでは特に、主催が当センターへ移行されてからの大会に絞って話を進めたい。

スピーチ大会への出場は、基本的に留学生の自主性を尊重し、本人からの志願が条件となってきた。言うまでもなく日本語教官や関係者は、出場者を募集し、日本語授業の履修者の中から出場を勧めるなど募集活動を行ってきた。しかし最終的には、留学生本人からの参加申込用紙の提出によって、出場者が決められた。

この結果、スピーチ大会への出場は、普段の日本語授業の履修とは別枠で、切り離された活動として行われてきた。すなわち、出場する留学生は、それぞれ自主的にスピーチのテーマを考え、原稿を作成し、練習することを期待されてきた。これは、同スピーチ大会がコンテストとして、スピーチそのものを評価の対象としてきたことから生まれた特性と考えられる。

また、第3回の大会以降、その報告集としてスピーチ原稿が小冊子としてまとめられ、関係者に配布されてきた。そのために出場者は、大会当日よりも前に、完成したスピーチ原稿を提出することが課せられている。

2.2. スピーチ原稿作成に際しての問題点

すでに述べたように、留学生の出場者にとっては、スピーチ原稿の作成およびネイティブ・チェックを受けることが不可欠である。このような支援を求めてきた留学生に対して、

日本語教官は、既定のオフィス・アワーや別枠の相談時間を設けて、原稿の添削指導を行ってきた。また、希望者には、日本人学生で手伝ってくれるボランティア（以下「学生ボランティア」）を紹介する、という取り組みも行ってきた⁽¹⁾。特に昨年度は、当センターの非常勤日本語教官にも協力を依頼して、留学生一般に開放された日本語相談時間を設け、スピーチ大会出場者の原稿の添削指導もその業務に含めもらった。

しかしながら、上記のような支援は、あくまでも出場者本人が求めてきた場合に提供されたものである。したがって、せっかく支援環境が整えられてきたにも拘わらず、出場者の中には、結局これらを利用しないまま演壇に立つ者も残ってきた。その結果、以下のような問題点が生じてきた。

- a) 規定の制限時間を超えて、延々と長いスピーチをする。
- b) 出場間際になって、既に提出されていたスピーチのテーマを勝手に変更する。
- c) 文章量（話量）としてはそれなりに用意されているものの、重複する表現の繰り返しなどが続き、内容に乏しい。
- d) 英語や中国語など留学生の母語で原稿を書き、誰かにそれを翻訳してもらう。その結果、直訳も含めた翻訳調の残った文章表現となる。
- e) 留学生が現実に習得している日本語レベルよりも、はるかに難しいレベルの表現を用いて原稿を作成し、覚えられない、覚えても忘れる、正しく発音／発話できない、などの問題が生じる。
- f) 書き言葉の文章としては文法的／表現的に適切なものの、話し言葉のスピーチとして聞くと、何のことか意味がすぐに聞き手に伝わらない。

a) と b) については、当スピーチ大会の開催趣意を理解している人が原稿完成前に一度目を通せば、比較的簡単に対応できた問題と考えられる。しかし c) ～ f) に関しては、現職の日本語教官でも決して対応は容易ではない。日本語教育の知識のみならず、スピーチ教育の基礎知識も必要とされるからである。まして、その役を全くの素人である学生ボランティアに求めるには、明らかに範囲を超えた問題と言えよう。

ところで、日本語教官が支援する場合にも限界がある。当スピーチ大会が、普段の日本語授業とは別枠で開催される以上、スピーチ原稿の添削指導は時間外の指導として対応せざるを得ない。専任／非常勤の区別を問わず、教官にどれだけ指導の意欲があっても、限られた時間の中でそれを行うにはかなりの負担がある。他方、留学生は多くの場合、本格的な添削指導を受ける以前に、気軽に原稿を見てもらったり、ちょっと教えてもらうといった身近な支援を望んでいる。未だまとまりのない文章を教官に見てもらうことに、抵抗を感じる者も少なくない。その意味で、学生ボランティアは大切な存在となっている。

以上をまとめると、留学生の日本語スピーチ大会出場のための原稿作成に関しては、日本語教官と日本人の学生ボランティア、その双方からの支援が必要とされていることがわかる。両者は、それぞれ独自の役割を果たし、相互に補完し合う関係にあると言えよう。

2.3. スピーチ原稿作成のためサポート・システムの必要性

ところで、当スピーチ大会のように大きな行事となると、上記のような日本語教官および学生ボランティアを全体的にとりまとめるコーディネータの存在が不可欠となる。出場者と学生ボランティア、および日本語教官は初対面となる場合が多く、この三者のみで密接な連携関係を築くには時間がかかる。また、誰かが役割分担の責任を明確にし、それを共通のものとするように図っていかねば、連携関係にはずれやひずみが生じかねない。昨年、相談時間を担当した非常勤日本語教官からは、「あらかじめ専任教官よりスピーチ原稿の指導に関してオリエンテーションがあった方が良かった」という反省の声があった。これはまさに「何を」「どこまで」自分の担当役割として指導すればいいのかについて、明確な基準や指針が要望されたものと考えられる。

このことから、出場者の原稿作成を支援するために、日本語教官、学生ボランティア、およびコーディネータの間において、図1のようなサポート・システムを組織する必要性が考えられる。

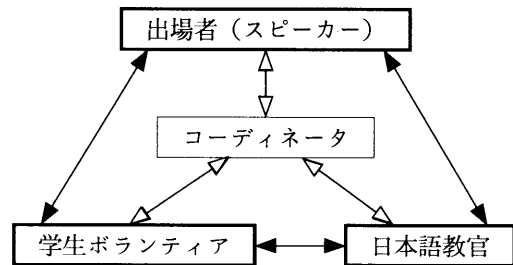


図1 スピーチ原稿作成のためのサポート・システム

3. スピーチ原稿作成サポート・システムの実施内容

上述のような状況と問題点を踏まえ、第12回留学生日本語スピーチ大会（2001年12月6日開催）に際して組織された原稿作成サポート・システムの実施内容についてまとめておく。なお、このコーディネータは筆者が担当した。

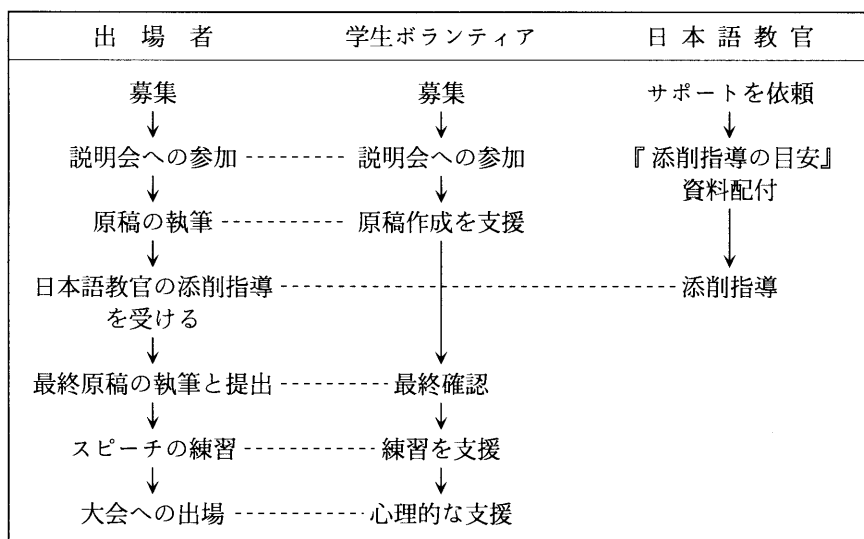
具体的な手順としては、次頁の表1のように行った。

以下、人材の募集、出場者と学生ボランティアへの説明会、日本語教官への『添削指導の目安』資料配付について、順にまとめておく。

3.1. 人材の募集

スピーチ大会への出場者の募集は、従来通り、当留学生センターの日本語授業の履修者

表1 原稿作成サポート・システムの実施手順



を中心に案内を配ったり、掲示板での広報によって募集された。参加申込書を担当者が受け取る際には、記されたスピーチのテーマについて日本語表現が適切かどうかをその場で確認し、場合によっては話し合っより適切な表現に修正した。また、日本人大学生の学生ボランティアの必要性の有無を確認した。参加申込者は8名で、1名の辞退者を除き、最終的に7名が出場者として確定された。そのうち、5名が学生ボランティアを希望した⁽²⁾。

学生ボランティアの募集は、いわゆる教養科目の共通教育総合科目「大学生の国際交流入門⁽³⁾」を履修者していた学生に協力を募った。これには7名の申し出があった。

出場者の確定に合わせて、当留学生センターでの非常勤日本語教官に、原稿添削への協力を依頼した。出場者の日本語習得レベルを把握している利点から、出場者が履修している日本語授業の担当教官に個別に協力を打診して、時間的に指導可能な方5名に依頼した。そのうち1名は二人の出場者の添削指導を担当し、他の4名はそれぞれ一人ずつ担当した。残りの一人の出場者に関しては専任教官が指導を担当し、結果として、出場者7人全員に対して日本語教官からの支援関係が成立した。

3.2 出場者と学生ボランティアへの説明会

出場者が確定した段階で、出場者と学生ボランティアに対する説明会を行った。出場者の中で学生ボランティアを希望した5名には、この場で紹介して各1名ずつ引き合わせた。いずれも初対面である。

出場者である留学生には、今後の大会当日までのスケジュールとそれに合わせての注意事項、および上手なスピーチの特徴などを説明した。

学生ボランティアには、そのスケジュールに合わせて、どのような支援をするかの説明をした。具体的には、以下の7点を指示した。

- 1) 出場者である留学生と話し合って会う日時と場所を決めること。
- 2) 出場者は、それぞれ日本語教官と会って添削指導を受ける日が決められており、それまでに原稿が一通りできるように手伝えること。
- 3) 原稿の作成を手伝える際には、翻訳をするのではなく、出場者が何を言いたいのかを聞いて、それにふさわしい日本語の表現を教えること。また、一文は短く、書き言葉ではなく話し言葉で書くこと。
- 4) 出場者が日本語教官に添削指導を受けた後、できれば、最終原稿の書き間違いや提出の確認をすること。
- 5) 出場者が最終原稿を暗記してスピーチを練習する際、聴衆が聞いてすぐにわかるように発音などを教えること。
- 6) 大会当日、出場者へリラックスするように声をかけてあげること。

3.3. 日本語教官への『スピーチ原稿の添削指導の目安』資料配付

日本語教官に関しては、時間の制約上、集まって説明会を行う機会が持てず、添削指導を行う際の目安として文書資料を配布した。これは、お互いの共通認識を確立する意味も意図されている。具体的には、以下の4点を中心に依頼した（cf. 本稿末の参考資料）。

- 1) 留学生の日本語レベルに合った日本語表現にすること。
- 2) 書き言葉ではなく話し言葉の表現にすること。
- 3) 一文を短くすること。
- 4) 複文よりも単文にすること。

日本語教官に添削指導を依頼した時間は、それぞれ出場者一人に対して、90分である。これによって、出場者は、指定された時間に指定された日本語教官から指導を受けることとなった。実施時間帯の調整は、コーディネータが行った。

また、当留学生センターの専任教官は、それぞれのオフィス・アワーを中心に、誰でも指導を受けられる時間として窓口を開いた。出場者の中で添削指導の時間が足りなかった者や、書き直して再度指導を望む者がこの窓口を利用した。言うまでもなく、専任の日本語教官にも上記『スピーチ原稿の添削指導の目安』の資料を配付した。なお、コーディネータをしていた筆者は、大会当日に審査員の役も担当することが決まっていたので、公平性

のため原稿添削は行わなかった。

4. 実施結果と考察

スピーチ大会実施後に、学生ボランティアならびに日本語教官に対して簡単な質問紙調査を行った。ここで、その結果を良かった点と問題点に整理し、考察を行いたい。

質問紙は自由記述式で、回答の目安として「問題点や困ったこと」「改善してほしいこと」「よかったこと」「留学生に望むこと」「その他なんでも」という項目を設けた。各項目にまたがって記入された回答も多い。調査票の回収期間は、2001年12月6日～14日である。回答者は、日本語教官は担当者全員の5名、学生ボランティアは1名を除く4名であった。(以下、表記の便宜上、出場者のうち5人を各々P、Q、X、Y、Zで記し、担当した学生ボランティアおよび日本語教官の区別を文末に付す。)

4.1. 良かった点

良かった点としては、以下のようなことが挙げられていた。

- a) 一緒に担当した学生ボランティアが、留学生にも教官の私にも非常に協力的であった。(Xの教官)
- b) いろいろな人と知り合いになれるのは嬉しい。国際交流レベルが多少アップ。スピーチをするということについて少し勉強できた。作文は昔から苦手だが、スピーチのための文はどのようにすればいいか、なかなか考えさせられた。(Xの学生ボランティア)
- c) 頑張る留学生たちと接し、自分にとってとてもプラスになった。今回のように、留学生の皆さんと接する機会があれば嬉しい。(Qの学生ボランティア)
- d) 留学生と触れ合いたいとずっと思っていたので、良い機会を与えて頂いたと思う。(Yの学生ボランティア)
- e) 外国の人と接することで、相手の国柄、文化などを知ることができ、自分の考え方や視野が広がったように思ったので、いい経験になった。(Zの学生ボランティア)
- f) 私は1回しか見てあげられなかったけれど、本番のスピーチの内容では、私の見たときの文は一つも入っていなかったのでよく頑張ったんだなあと感心しました。(Yの学生ボランティア)
- g) 留学生のスピーチを添削などで手伝うことができたので、当日、より身近な感覚で聞くことができて良かった。自分が手伝った留学生のスピーチが無事終わってほっとした。(Pの教官)

h) 『添削指導の目安』があったのは、指導する教師にとっても、学生ボランティアにとっても大変よかった。(Yの教官)

a) のコメントからは、短期間にも拘わらず、学生ボランティアと日本語教官の間にかなり密接な連携関係が形成されていたことが窺える。

また、b)～f) の学生ボランティアによる感想は、いずれも留学生と初めての接触として、このサポート・システムでの経験が肯定的に評価されていることが窺える。よく似た共感ないしは成成感g)のように若い日本語教官の中にも生じている。

他方、今回、「何をどこまで添削すればいいのか」という声は学生ボランティアおよび日本語教官いずれからも聞かれなかった。すなわち、h)にあるように、事前の説明会や資料配付がそれなりの功を奏したと考えられる。

4.2. 問題点や改善要望

次に、問題点や改善要望として挙げられたものを、(1)原稿添削時の問題、(2)日程およびシステムの運営上の問題、(3)原稿作成以前の問題、の三つに分類して整理しておきたい。

(1) 原稿添削時の問題

- a) 自分が普段何気なく使っている日本語だが、添削となるとすごく難しかった。担当したZさんの国の文化や宗教を私はほとんど知らなかったので、本人がどういふことを言いたいか理解し兼ねることが多かった。(Zの学生ボランティア)
- b) 自分の日本語力に自信がなくなりました。教えるのはたとえ母語でも難しいと思いました。(Yの学生ボランティア)
- c) できあがった原稿を学生が勝手に変更し、その連続で疲れた。(Xの教官)
- d) 添削時に分かった振りをしないでほしい。(Zの教官)
- e) ワードプロで打ち出した原稿だったので、学生自身が読めないのにも拘わらず漢字が使用してあることが多かった。そのため、添削時に少々時間がかかった。正式な原稿以前のもの、手書きにするか、ワードプロ文書でも知らない漢字は使用しないなどにするほうがいいと思う。(Zの教官)

原稿添削時の問題点は、思いの外少なかった。学生ボランティアからのコメントa)とb)は、日本語教育の素人としては無理からぬ声と言える。この経験が、将来何らかの形で発展していくことを期待したい。c) d)に関しては、出場者の個人的な性格によると

ころが大きい問題であろう。e) のワープロ文書に関する対策は、教育効果から考えても、早急に取り組むべき課題と考える。

(2) 日程およびシステムの運営上の問題

- a) 最終原稿提出日から大会当日までの間が短かったので、暗記のための時間が少なくて大変そうだった。(Qの学生ボランティア)
- b) 指導時間が短くて、原稿添削しかできず、発音を直すことがあまりできなかった。もう少し時間があればよかった。(Pの教官)
- c) 準備期間が短いこと。(Xの教官)
- d) 自分のスケジュールが一杯であり、出場者とうまく合わせられなかった。出場者1人に対して学生ボランティア2人ぐらいにしないと、私のようにあまり見てあげられない。(Yの学生ボランティア)
- e) 今回、留学生と日本語教官が一对一で担当したが、日本語教官が非常勤の場合、時間調整の面で留学生・教官共に大変なのではと思った。(Pの教官)
- f) 事前に担当学生のスピーチのテーマが分かった方がよかった。私の場合、テーマの宗教について知識が少なすぎ、事前に下調べをしていればもっと効率的な添削ができたのにと悔いが残る。(Zの教官)
- g) 賞を与えるという評価があることについて始めに教えてほしかった。(Yの学生ボランティア)
- h) 出場者が参加申込書の提出担当者からテーマの再考を指導・助言されたとのことだが、その経緯を連絡してもらえる方法があれば、引き続いての指導がしやすくなったと思う。(Yの教官)
- i) 早くから出場する学生が決まっているとよい。また、出場する留学生が少ない。もっと広く参加するとよいと思うが、無理であることも承知。何とかいい方法はないものか。(Xの教官)

日程およびシステムの運営上の問題としては、まず、日程間隔があまりに接近していたことが大きな問題としてa)～c)に指摘されている。この原因は、全く別の事情により、大会開催日が当初予定よりも一週間早まったことから生じた。d)とe)のコメントには、サポート・システムにおける人材の調整の難しさが浮かび上がっている。他方、f)～i)のコメントは、コーディネータによる連絡の不行き届きに起因するものである。いずれも、事前に、あるいは必要に応じてコーディネータから周到に連絡が行き渡っていれば改善の余地があったであろう。サポート・システム内において、コーディネータを含めた連携の

さらなる強化が必要とされている。

(3) 原稿作成以前の問題

- a) 最初に何も用意していなかったので、何を話したいのかから整理した。また、私に任せようとする態度が少し見られた。母語や英語でもいいから、最低限のことは準備してきてほしい。(Yの学生ボランティア)
- b) 日本語としてどうかを見たらいいのかなと思っていたら、言いたい内容がまとまっておらず、添削というより文を考える所から始まった。結局、日本語教官が苦勞してまとめられたそうだ。もう少し時間があるか、あるいは日本語でなくても文自体を完成させてからだと支援しやすかったかも。でも、一緒に文を考えるのも面白かった。(Xの学生ボランティア)
- c) 原稿ができていない学生が来たので、90分では指導できず、どのように対処すればいいか困った。(Yの教官)
- d) 初めに英語でスピーチを書いてから日本語にすると、どうしても自分の能力より上の日本語の文を作らざるを得ず、その結果、かえって難しい原稿になって負担が増えるということを知っておいてほしいと思った。(学生の立場になると、先に英語で書いてから…という気持ちもよく分かるが)。(Zの教官)
- e) 出場者が自分の力でできる限り原稿を書くようにした方が、よりよいスピーチになるのではないかと思う。研究室の先生や学生に助けてもらうことも必要かもしれないが……。 (Pの教官)
- f) 日本語の添削だけに限れば特に問題なし。しかし、話の進め方、内容に問題があり、全部書き換える必要性を感じて困った。原稿を作る前にそれらを話し合ってから作らせた方がいいと思った。(Qの教官)
- g) “単に添削をしておしまい” というのではなく、実際に学生がスピーチをしているところを見て（聞いて）より良い物に仕上げていく過程にも参加できたら良かったと思った。原稿の添削のみでは、やはり気を付けてはいてもスピーチとしては不自然な部分や、学生の口がついていけない部分をカバーしきれないだろうと感じた。(Zの教官)

最後の原稿作成以前の問題としては、出場者の中に、原稿を十分準備しない（できない）まま学生ボランティアに会ったり、日本語教官の添削指導を受けに行った者がいた点がある。a) と b) のコメントからは、学生ボランティアが困惑した様子が見取れるし、c) のコメントからは日本語教官の前でもそれが生じていたことがわかる。また、母語や英語

からの翻訳しないように促したにも拘わらず、実際にはそうせざるを得なかった状況が d) に浮かび上がっている。a) や e) のコメントからして、出場者の中には甘えた考えを持っていた者がいたことも否めない。

これらの問題は、ひいては原稿作成サポート・システムでの役割分担の再検討にも発展してくる。今回、日本語教官には原稿の添削指導のみを依頼したが、f) ではそれ以前に日本語教官が関与する必要性が指摘されている。また g) には、添削指導後にも日本教官による関与の必要性も指摘されている。

当然のことながら、よりよいスピーチを行うためには、日本語教官が初めから終わりまで全ての支援／指導役割を担うことが望ましい。ただし、それは日本語教官の負担増加をも意味する。今回、日本語教官に依頼した添削指導は 90 分が 1 回のみであった。しかし現実にはこれでは不十分で、半日以上つき合ったり、時を改めて何度も指導を継続せざるを得なかった場合が報告された⁽⁴⁾。その熱意に深く感謝すると共に、このサポート・システムにおいて役割分担の再検討を行う際は、学生ボランティアとの分担範囲、加重負担への配慮、コンテストとしての評価基準との関連性など、複数の問題を含めて総合的に考える必要性を痛感する。

5. おわりに

以上、本稿では、日本語を母語としない外国人留学生が、日本語のスピーチ大会に出場するためにスピーチ原稿を作成する際、その作成を日本人のボランティア学生と日本語担当教官の両者が協力して支援するシステムの必要性を指摘した。そして、2001 年度の三重大学における留学生日本語スピーチ大会において実施した同システムの問題点を整理して考察した。そして特に、コーディネータを含めた連携のさらなる強化、および日本人のボランティア学生と日本語担当教官の役割分担の再検討の必要性を指摘した。

謝 辞

今回のスピーチ大会開催において、原稿作成段階における日本語教官の関与の重要性を指摘し、そのコーディネータの役割を筆者に向けてくださったのは、当留学生センターの教官、花見槇子教授である。今回の本稿をまとめるに際しても、氏からいただいた問題点のご指摘やご助言は数多い。記して感謝申し上げる。また、今回の原稿作成サポート・システムを支援して下さった日本語教官ならびに学生ボランティアの皆さんにも心から謝意を表す。なお、本稿での記述に関する責任は、全て筆者にあることは言うまでもない。

注

- (1) 1999年度および2000年度のスピーチ大会では、日本人学生と留学生の交流サークルのメンバーが中心になって同大会の企画運営を行い、留学生の原稿作成に関しても支援を行った。花見(2000a. b)には、この企画運営に関する問題点が報告されている。
- (2) 残りの2名は、既にいる友人にその役を自分で依頼したという。既に親しい間柄での支援関係は、新規に提供されるそれよりも望ましいことは言うまでもない。
- (3) この科目は、2001年度後期に当留学生センターの専任教官4名がリレー方式で15回会の授業を担当した。主に大学1, 2年生を対象としており、スピーチ大会への聴衆としての出席も授業の一環として組み込まれた。
- (4) 学生ボランティアの面会回数は、5回を超えた人が3人おり、最多で7回、最少で1回であった。

参考文献

- 花見 槿子 (2000a) 「留学生日本語スピーチ大会：留学生と日本人学生との共同企画プロジェクト－実行委員たちの反省討論記録から－」『留学生と日本人学生の交流活動推進のための研究』平成11年度三重大学教育研究内容改善経費による研究プロジェクト報告書(研究代表者：花見 槿子)、pp. 1-14
- 花見 槿子 (2000b) 「日本人学生と留学生との交流：対等な関係の模索(その2)－4人の日本人学生の面接記録から－」『留学生と日本人学生の交流活動推進のための研究』平成11年度三重大学教育研究内容改善経費による研究プロジェクト報告書(研究代表者：花見 槿子)、pp. 15-31
- 前川基久雄 (2001) 「スピーチのデータベース－『日本語話し言葉コーパス』について－」『日本語学』20(6)、pp. 12-27、明治書院
- NHK アナウンス室 (1986, 1987) 『NHK はなしことば講座』(ラジオ講座テキスト) 日本放送出版協会
- 土岐 哲 (2001) 「日本のスピーチ教育」『日本語学』20(6)、pp. 6-11、明治書院
- 宇佐美洋 (2001) 「これからのスピーチ研究－日本語教育の立場から－」『日本語学』20(6)、pp. 37-47、明治書院

参考資料

スピーチ原稿の添削指導の目安(抜粋)

留学生にとっては、スピーチの準備には多大な労力を要します。添削する側としても、学生の話したいこと、伝えたいことを尊重しながら、赤ペンを入れていくのは本当に大変なプロセスだと思います。けれども、それだけ苦労して準備したスピーチが、聴衆にとって聞き苦しかったり、意味の伝わりにくいものになったりしては、これほど不幸なことはありません。日頃の授業では、なかなかスピーチ指導の時間はとれませんが、作文を直すというよりも「スピーチのための原稿の準備

をする」という観点からご指導いただければ幸いです。

1. 留学生の日本語レベルに合った日本語に

初級の学生が上級レベルの語彙や文型を使って作文しても、スピーチをする場合には覚えることが困難だったり、発音できなかつたりすることが多々あります。わざわざ日本語の先生にご指導いただく最大の理由は、日頃接している留学生の日本語レベルをよくご存じのためです。無理に背伸びした表現は、その学生に合ったレベルの表現に直してください。

例) (初級の場合) 本当か否か疑わしい → 本当かどうかよくわからない

2. 書き言葉ではなく話し言葉に

原稿の準備というと、多くの場合書き言葉での表現となります。しかし、今回はスピーチのための原稿ですから、できる限り話し言葉で書くように直してください。

特に、中国系の学生の原稿は漢語の使用が多くなります。漢語を音として聞く場合、非常に聞き取りにくいだけでなく、意味の理解も難しくなってしまいます。

例) カンショウする → 鑑賞? 干涉? 仮称? → (絵を) みる

3. 一文を短く

日本人向けの話し言葉講座でも、わかりやすいスピーチの大原則は「短い文で話すこと」と言われています。まして留学生にはその重要性は言うまでもありません。具体的には一文が40字前後です。そんなに短くていいのか、と思われるかもしれませんが、これはあくまでも話し言葉の原稿準備の場合です。学生は、その原稿を全て覚えて、正しい発音でスピーチしなければなりません。学生に読ませてみて、すらすらと読めない場合は、なるべく句点(。)を増やして、短い文に直してください。

4. 複文よりも単文で

上記の「短い文で」ということに関連しますが、複雑な構造の文になればなるほど聴衆にとっては理解しにくくなります。たとえ上級の学生でもできる限り単文にして、順を追って聞けばその通りの順番で理解できるように文を組み立ててください。

その場合、特に接続詞の役割が重要になってきます。接続詞の習得は難しく、なかなか上手に運用できませんが、この機会にぜひ積極的にご指導ください。